



ikilik  
いきりつき  
創刊号〈エルマ〉

〈単語集 sözcük〉  
エルマ elma〔名〕  
(1) りんご  
(2) 『アレヴィー』友情 (dostluk) の象徴。  
愛 (aşk) を象徴する蜂蜜、愛情 (sevgi) を象徴するミルクと並び、預言者ムハンマドが神から賜った贈り物の一つとされる。客を招く際に親しみを込めて提供されるほか、仲直り・和解の際に友情の証として贈られることもある。

いきりつき 創刊号〈エルマ〉  
執筆／翻訳 | 今城高彦・真殿琴子  
編集／デザイン | 川野太郎  
絵 | Felek Taş (フレレキ・タシュ)  
発行 | Orcinus Orca Press  
(responsetolight1852@gmail.com)  
2021年6月16日 初版第1刷発行

クルトゥルシユさんによるしく

「フィールドワークをしていると、人ど人どが思いもよらない形でつながることがある。それは二〇一五年の春休み、まだ学部三年生の私がフィールドワークに憧れてトルコを訪れたときのこと。私が目指したのは、ムスリムの少数派アレヴィーの人々にとって聖地とも言われるハジュベクタシュという町である。十三世紀の聖者ハジュ・ベクタシュ・ヴェリが眠る町で、毎年トルコから参詣者がやってくる。本格的な調査は叶わないとしても、卒業論文のテーマに選んだ人々の暮らしを一目見てみたかった。

ところでトルコ社会をサバイブする上で重要なのが、知り合いを作ることである。政治やビジネスは言うに及ばず、コネがあるのどないのどでは事の運びが段違いなのだ。ハジュベクタシュ町へ行く一週間前、運良くそこに知り合いがいるという人物を見つけた。イスタンブルにある有名なジエムエヴィ(アレヴィーの集会所)、カラジャアフメト・ジエムエヴィで出会った男性で、名をマンズール(仮名)といった。彼はハジュベクタシュ町の中心部にある博物館に長年の友人がいるという。「ハジュベクタシュ博物館に行くなら、職員にクルトゥルシユという男がいるはずだ。長年友達なのだが、最近ぼつたり連絡が途絶えてしまっただけ。彼によるしく伝えておいてくれ」と彼は言った。

さてその一週間後、私はアンカラからバスを乗り継ぎ、念願のハジュベクタシュにたどり着いた。さっそく、マンズール氏の知り合いがいるという博物館に足を運んだ。博物館は、町の名の由来ともなっている聖者廟を中心にかつて活動していたベクタシー教団の修道場を改修し

たもので、聖者や教団ゆかりの品々が展示されているだけでなく、建物のディテールひとつひとつに逸話が残っていた。職員の方々は親切にもそれらを丁寧に説明してくれた。

一通り説明を受けた後、博物館の管理室に招かれ紅茶をご馳走になった。雑談をしているうちに、私はマンズール氏の知り合いのことを思い出した。このつながりを生かささない手はないと思い、「そういえばクルトゥルシユさんという方はいらっしゃいますか? カラジャアフメトのマンズールさんがよろしくとのことでした」と言った。

これ聞いた職員たちは一瞬凍りついたが、すぐに「そんなでもないことが起きた」と笑い転げた。ちょうどその時、クルトゥルシユ氏が茶を飲み部屋へ上がったので、職員の一人在彼にこう言った。「おお、クルトゥルシユさん。いま日本人のお客さんが来てるんだがね。カラジャアフメトのマンズールさんからクルトゥルシユさんによるしく伝えてくれと頼まれたそうだな」

これ聞いたクルトゥルシユ氏は腰を抜かして茶をこぼしそうになった。彼は「君、まさかそれを言うためにここへ来たのではなからうね……?」と顔を青くした。

なぜこんなに驚かれるのか私にはわからなかったが、よくよく聞いてみると事情がはっきりした。マンズール氏は確かにクルトゥルシユ氏と知り合いではあったが、彼は度を越してしまったのだ。かつて博物館を訪れたマンズール氏は、そこで知り合ったクルトゥルシユ氏に昼も夜も構わず電話をかけたまくり、その度に「会おう」「イスタンブルから会いに行くから」と追っていたのである。連日の電話にクルトゥルシユ氏は寝不足になり、しまいには髪が抜け落ちてしまうほどだった。それでクルトゥルシユ

氏はついに電話番号を変更し、マンズール氏と縁を切ったそう。彼は私にこう言った。「やっと解放された! と喜んでいる時に日本から君がやってきて『マンズールがあなたによるしく言ってます』というのだから、肝を冷やしたのなんのって。本当にびっくりしたよ」



ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ博物館 (撮影: 今城高彦)

ニヤーズイー・ムスリー『詩集』より  
私は思っていた、世界に友など誰もいないと。私は私を捨て、見渡せば敵は誰もいなくなった。

あらゆるものを見ては思っていた、棘はあるのに薔薇がないと。  
今や世界の全てが薔薇園に、棘は一切なくなつた。  
四六時中涙は途切れず、心は悲痛に泣いていた。何が起きたか分からずに、ああ、と言って涙は途切れ、悲しみはなくなった。

多は去り、一が来て、親しい友と対面した。  
世界の全ては真理そのものになり、街も市場もなくなった。  
宗教と教義、慣行と称賛の全ては風に放たれた。おおニヤーズイーよ、一体何が起きたのか、おまえを縛る盲信の鎖はなくなった。

Niyazi Mırsi, *Diyadin Niyazi*, İstanbul: İsmailiyye Binyıldızlı, 2015, pp.54-55.  
Ms: Osman Ergin, *Türkiye ve Vakıfların Tarihi*, İstanbul: İsmailiyye Binyıldızlı, 2015, pp.54-55.

ニヤーズイー・ムスリーは十七世紀のオスマン朝を代表するスーフィー詩人であり、思想家(一六一八―一六九四)。今紹介する詩は、2行(「1ペイト」)ずつ構成された詩であり、ひとつのペイトの後半の行――「ムスラー」(ペイトは2つの「ムスラー」から構成される)の末尾が「なくなった」(原文のトルコ語では *Kalmadı*)で全て統一されている。前半のムスラーと後半のムスラーの間にある詩人の精神的な変化に注目してほしい。「友」と呼ばれる神との再会によって「私」は融解していく。

創刊のこぼし 今城 真殿

今城(文化人類学) ◆トルコの人たちと関わっている時、時々「なんで電話しないんだよ」と怒られる。彼らの方はどういうと、私がトルコにいようが日本にいようがお構いなしにいきなり

電話をかけてくる。なぜかそういう電話に限って食事や就寝のタイミングでかかってくるものだ。この電話を取ったらあれどこれが後ろ倒しになるから寝るのが一時間遅くなるな、などという考えが頭を駆け巡る。しかし同時に、私は友人たちのこうした暑苦しいほどの人懐っこさに救われながら、トルコで生き延びたことも思いつく。

思えばたかさんのトラブルがあった。研究調査を始めた途端にキャッシュカードがATMに吸われて出てこなくなったり、パスポート・滞在許可証など大事なものが入ったカバンを盗まれたり。熱中症で点滴を受けたこともあった。そんな途方に暮れる私を「待ってました」とばかりに助けてくれたのは、こうした友人たちだ。だが自分を顧みれば、一方的に世話になってばかりな気がする。電話もかけないので怒られてばかりだ。「論文ができたから見せてね」と言われるが、私が民族誌に書けるのは膨大な交流のごく一部であり、彼らから教わったことの大半はこぼれ落ちてしまう。

この恩返しは関係を続けるなかでしていくつもりだ。本誌「いきりつき」ではまず、論文には取まり切れない彼らとの交流を記録していくことから始めたい。友人たちの親しみ深さにお返しをするつもりで、私たちは「いきりつき」の創刊号を(エルマ)と名付けた。これは、これまで私たちを気にかけてくれた友人たち、そして本誌を手を取ってくださった皆様に贈る親しみの気持ちである。

真殿(宗教思想研究) ◆トルコにいる間、他人から何かしら必要な情報を引き出そうと必死になる悪いインタビューアーかのように自分のことを感じる時があった。会話が苦手な人間、あるいはまだ外国語の習得が十分でない人間の悪い癖として、質問ばかりしてしまうというものがある。ある時期から、その癖に気がつき嫌になつてあれこれ質問するのをやめてしまった。時々日本のことを聞かれ、答える。ふーんと言われて、会話はまた別の方向にそれる。どうしたらいいものか、と思ううちに一人で過ごせばいいのだと気がついた。それで、イスタンブルにいる間は宿舎と図書館など決まった場所の往復しかやることがないので、なるべく一人でいた。しかし、そうしていても電話はかかってくる。今どこにいる? 何してる? これからむかってもいい? 夜はなにをするの? 明日はなにをする? いつ日本に帰るんだっけ? 質問攻めに合う。これまでわたしがやってきたことへの仕返しのように。

そんなわたしが同業者兼友人の今城くんを誘い、翻訳家でOrcinus Orca Pressの発行人の川野さんを巻き込み創案したこの雑誌「いきりつき」――ikilik(「ふたつであること」などという意味)は、トルコと関係しているうちに体験したあらゆる類の対話の集積である。わたしは一度、イスタンブルの小さな書店で働く真面目な極右思想の青年に「君はまるで本を読んでいるかのように人を観察しているね」と言われたことがある。あなたに警戒していただけだと答えたが、的確な指摘だと思った。本を読むように距離をとってはい決して対話は実らぬ。本を読んでいるだけ、話を聞いているだけの自分は世界と本当につながっているのだろうか。わたしは今、語り合うべきだとあえて思う。時に、聞き手は語り手として、読者は筆者として言葉を放つ。これからわたしが書くことは、わたしのこれまでの対話の記録であり、結果である。わたしたちの雑誌が、わたしたちとあなた、わたしたちと作品というような分裂した世界と世界の間を壁をぶちぬく、風穴になることを願う。ここから、時に新しく、時に懐かしい風が吹き抜けていくように。(了)